

授業者、遠隔システムの状況

古河市立三和中学校（配信校）

専門人材 or
優れた指導力をもつ人材

松本 理恵先生

- ▶ 配信校において授業を実施（教科担任として自校の学級にも同時に指導）
- ▶ 優れた指導力をもつ人材として配信校に勤務

館野 陽季先生

- ▶ 配信校に勤務、外国語担当教員



受信校（第2学年）



三和北中学校
内田 亨 先生



三和東中学校
関 亜季子 先生



授業の計画 中学校第2学年 英語 単元名 PROGRAM6「Live Life in True Harmony」

時	学習内容	形態		授業における工夫や課題、解決策 (1人1台の端末の活用も含む。使用OS: Chrome OS)
		教科担任	専門人材 対面 遠隔	
1	<ul style="list-style-type: none"> ■単元の目標を知り学習の見通しをもつ。 ■古河市の魅力(場所・食べ物・イベント)について伝え合うことができる。 		○	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の課題やニーズの解決に向け、生徒が主体的に取り組むことができる課題を設定し、相手意識・目的意識を明確に示した。 ○単元のゴールに向けた学習活動や単元計画を共通理解するため、単元のスタートの場面を他校との遠隔授業とした。 ○Google Meetを使って、他校の生徒と、課題について話し合い、交流することで、生徒が主体的に課題に向かうことができた。
2-4	<ul style="list-style-type: none"> ■古河市の魅力(場所・食べ物・イベント)について教科書を参考に自分の考えを書くことができる。 	○		<ul style="list-style-type: none"> ●配信側と受信側におけるやりとりの課題 →配信側の指導者と受信側の指導者のTeacher Talk等を通して、3校のチームティーチングスタイルを取り入れた。 ●Google Meetのグループ活動でのやりとり場面に課題 →各グループ内にリーダーを設定し、やりとりをつなげていく対応。 ●3校の生徒の発話内容を確認することが困難 →Googleドキュメントの同時編集作業を活用した。
5 本時	<ul style="list-style-type: none"> ■友達との交流を通して、紹介文のアイデアを共有したり広げたりし、分かりやすい文章を書くことができる。 		○	<ul style="list-style-type: none"> ○スモールトーク後、生徒は発話した内容をGoogleドキュメントに入力した。配信者は、3校の生徒の英文を即時に確認し、中間指導やフィードバックに活用した。 ○各自が作成した紹介文をもとに、遠隔授業を通して、アイデアを共有したり広げたりし、より分かりやすい文章を書くことにつなげることができた。 ○AIドリルQubenaを活用し、ワークブックを3校に配信した。学習内容の確認や復習に活用することで個別最適な学習を実現し、知識・技能の定着を図った。
6-8	<ul style="list-style-type: none"> ■スティービー・ワンダーの曲や信念について書かれた文章を読み、概要を捉えることができる。 	○		
9	<ul style="list-style-type: none"> ■友達が書いた古河市の魅力について、アドバイスをし合い、より分かりやすい文章を書くことができる。 		○	
10	<ul style="list-style-type: none"> ■パフォーマンステスト ・寄せられた投稿への回答 	○		

○工夫、●課題、→解決策

実施記録



スモールトークドキュメント
(3校同時に入力)



3校での交流
(グループごとに交流)



受信校の指導者は配信校の指導者と連携し授業を展開

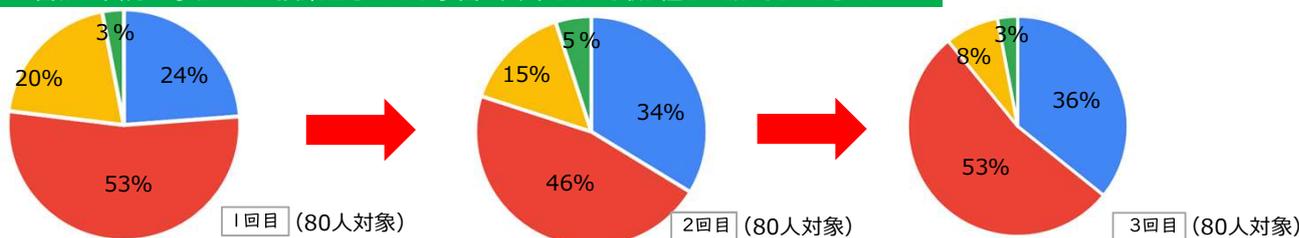


配信校、受信校同士で事前に打合せをしている様子

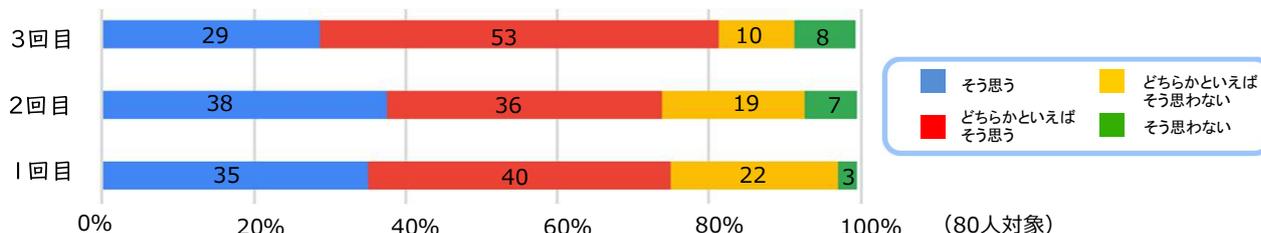
アンケート結果

生徒

普段の自分の学級だけの授業と比べ、より学習に興味をもって取り組むことができたと思う。



他校の友達と交流することで、一層自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思う。



生徒の振り返り

- ・他校の友達と交流することで、自分の考えに新しい考えを付け足し、より良い文章を書くことができた。
- ・遠隔授業を通して、新しい考えも持つことができ、やりとりが少しずつ長くできるようになり、話す力も伸びたと感じる。
- ・今後社会人に近づいていくので、学校以外にも人間関係をもっと深める良い機会になった。英語の実用性も感じる事ができた。
- ・同じ学校だと同じ勉強をしているため、やりとりがほとんど同じことが多いが、他校の友達との交流で表現の幅が広がった。

アンケートや年間を通しての考察

成果

- 他校の友達と日常的な簡単なやりとりから段階的に言語活動を行ったことで、学習活動における積極的な交流につながった。
- 技能統合型の活動（「話すこと」から「書く活動」）を繰り返したことや、AIドリルQubena(株式会社コンパス提供)を活用した個別最適な学びにより、学習履歴を活用した客観的な場面ができ、学力向上にも効果が見られた。

【英検IBA 正答率の経年変化】

【AIドリルQubena 正答率の変化】

対象：中学2年生平均 三和中・三和北中・三和東中	CSE スコア	対象：80人 三和中・三和北中・三和東中	正答率 (%)
令和4年度	625	調査一回目(9月実施)	71.6
令和5年度	650	調査二回目(11月実施)	85.8
	+25		+14.2

- 課題設定の工夫により、英語が社会の中で役に立ったという実感をもてた。
- 3校の指導者が協働で授業を実施することで、単元全体を見通した言語活動や領域統合型の活動の実践等、授業改善につながった。

課題と対応案

- 指導者が生徒全員の発話内容を把握できないことが課題である。
→配信校指導者によるGoogle Meet上のオンライン指導と、受信校指導者による対面指導を行うことで学習状況把握に努めた。
- sharingタイムの持ち方
→各学校の指導者が、それぞれの教室で、sharingを行い、中間指導した内容を3校で共有した。
- 授業の進め方に関する共通理解
→Googleチャットでの日常的なやりとりに加え、Google Meetでのオンライン、対面での打ち合わせを行い、共通理解を図った。